

## 夏の大会後練習 見学

長崎商業高校が甲子園出場を決めた翌日今村と梅雨明けの炎天下の長工グラウンドに登ってきました。

午前中だけの見学でした、あいにく監督は不在、末



永顧問が元気いっぱい、声を張り上げながら指導していました、部員はノック、内野のパス回し、タイヤ叩き、トスバッティングなど汗だくになりながら一生懸命取り組んでいました。新チームは朝日新聞が出している選手名簿からみると3年生23人が抜け、残り69人が部員ということになっています。

写真は壮行会でも挨拶した今村が部員に話をしているところです。話の内容はまとめてもらっているのでできしだい掲載したいと思います。

このキラキラ太陽があまりにも眩しかったので自分たちの頃が思い出された、それで取り留めない話になりますが思いつくまま書いてみます。

2年生の夏は本村投手の好投で代表決定戦まで進んだが海星に0-2敗退したので我々残った1、2年生の長い夏の練習が始まった。1年生の夏は良く覚えていません。死ぬほど辛い The Longest Month でした。しかし田口監督に1日も休まずに指導していただいたことは本当に感謝しています。家庭を犠牲に大変だったろうと思います。私も似たような経験があったのでよくわかります。

家野町の工業には野球部専用のグラウンドはなくテニスコート、バレーボールコートその他、100×80m（多分）の運動場はラグビー、サッカー、野球の共用でした。現在の長崎南高の状況と似たようなもの。

私が入学した時のラグビー部は高体連7年連続優勝と県内では敵無しでラグビーの甲子園である花園に出場、慶応高校に3-0で負けたのを覚えています。ラグビー部は硬球の打球を物ともせず走り回っていました。打球が当たっても平気で猛者が揃っているなと思いました。しかしその時がピークで監督の林田先

生が諫農転勤後は低迷が続いているようです。一方野球部は田口監督が就任全部員20名と少ないながら徐々に力をつけつつあった。今年はチャンス、心強いエース森の健在と期待されていた（長崎新聞夏紹介記事）

グラウンドは元三菱兵器工場跡地のため（30cm下はコンクリートということでした）雨が降れば水はけが悪くぬかるんでいました。

グラウンドの整備、ブルペンも手作り田口監督自らツルハシを振るった。力任せに振る我々現役高校生はというとすぐ息が上がったものです。監督は振りかぶるときは軽く地面に当たる瞬間に力を入れるというこつが抜群でした。これがバッティングの極意か？監督は昭和8年生対馬高校から日体大に進み、ラグビーのウイングでレギュラーとして活躍、野球は素人でしたが選手の特性をみて適材適所へ配置するなどに加え独特の勝負勘で16年振り県大会で優勝、九州大会へ出場、次の年は西九州大会に出るなど実績をあげた。

44年長崎国体からは浜村さん（今年長崎南高監督）をコーチに迎えからは二人三脚で、甲子園は今一步というところで叶わなかったが、県内屈指の強豪高校仕上げました。

当時の部員はというとバックネット前で撮った41年卒業記念写真をみると全員で33人、3年生は8人です。今の三分の一くらいです。ちなみに1年生の時卒業記念に写っているのは20人しかいません、3年生6人、2年生8人、1年生6人、人数が少ないのにびっくりします。一因として当時はバスの本数が少なく野球をやりたいくても帰りの足が無いためやれなかったと式見に住んでいた友人から聞きました。また本村先輩は帰りのバスの都合で毎日練習を早退、西彼杵高浜から通学していました。

私の世代は（41年卒）8名で一人が逝去。この7名はOB会にも協力してくれます。先日も昭和41±1年会と銘打って飲み会も開催しました。高校時代苦労を共にした仲間は本当にありがたい存在です。

バックネット裏にある部室（更衣室）は狭くて夏は汗臭く、冬は寒さで震えながら着替えをしていました。

冬場のランニングは学校を出て岩屋橋方面へ、純心高校前から西浦上中学を経て住吉の電车道へ出て時津の江原パン（今は無い）までのコースでした。当時は交通量が少なかったのでしょう今だったら危なくて走れません。

夏の暑い盛り、練習中の給水は禁止なので楽しみは休憩時間の氷水、真っ先に買いに走りました。田口監督特製の黒砂糖ジュース（黒砂糖を手でつぶして溶

かした氷水)、渡邊のジュースの素などが最高の飲み物でした。本当に美味しかった。

バッティングは1人5本の2回が多い方で空振りも1本のうちに数えました、コントロールの悪いピッチャーは大変で効率の悪い練習でした。私が1年の頃は球が早いノーコンだったのでバッティングピッチャー失格でした。ある3年生からはブツブツ文句を言われました(打てもせんのにこの先輩はと思っただけですが(笑)、名前は不記載)

使用しているバットは竹バットが多く、木のバットは主に試合用でした、寒いとき使えば手がしびれ悲鳴をあげるくらいです。今使用しているような手袋はなくあるのはせいぜい軍手くらいでした。

一つ上の先輩堀川捕手は盗塁阻止のための投球練習をしていたときの話ですがプロテクターはダブダブ、レガースはすねの長さに合っていないもので、投げるたびにがぶって投げ辛そうでしたが繰り返し投げていました。

練習試合をしてくれる学校はほとんどなく、雨上がりある高校に申し込んでグラウンドコンディションが悪いからと断られたこともあります。工業のぼろグラウンドが使える状態であってもです。唯一南山高校だけは相手をしてくれました。清水監督は厳しい人で甲子園にも出場、ミス等したら試合途中でも中断しやかましく注意しているというか怒っていました。それにつられて田口監督もそれを見習ってか同じようにしてそれは凄惨な光景でした。怒号合戦(笑)怒ると対馬弁なまりの早口で意味不明もありましたが声は大きかった。

そのせいか?16年振りに九州大会に出場、鹿児島までは当時は国鉄の汽車に乗って行ったわけですが、初めて乗ったという人もいて半分は観光気分でした。それに初めてウインドブレーカーをもらったことを思い出します、当時ベンチ入りは14名でしたがレギュラーの9名分しか揃えず、残りは学生服のままでした。(記憶違いかも知れませんが-14名に配給か?)

他県の高校と練習試合をしたのは一回しかなく(私の記憶では)相手は熊本の九州学院でした。場所は油木町にあった長崎商業グラウンド。

九学の4番打者は柳田、強烈なヒットを打たれましたが4対1で勝ちました。その後プロ入り巨人の5番、毒蝮の柳田と言われてました。いい思い出でした。

私は夏の練習に入ってからすぐデッドボールを右手に喰らったためピッチングが出来なくなり一夏走ってばかりいました。当時若葉町の電停近くに高松整形

外科がある場所から坂を上って下ってまた上って下って西浦上中学校まで、往復していました。(何往復かは忘れましたがグラウンド練習が終わりちかくまで)



昭和39年当時のuniform

新しいウインドブレーカーで昼食(鹿児島鴨池球場)

今思えばこのトレーニングが功を奏したかも知れません。誰も見ていないのでさぼろうと思えばいくらでもサボれましたがほんとうにまじめに走りました。野球は打って走って掴んで投げて。力をつける。技能的なことは反復練習、理にかなった方法で数をこなして身につける以外はないと思います。

